２０２４／１２／２９　　礼拝メッセージ　　近藤　崇志　牧師

主　　題：　御子が世に遣わされた理由
聖書箇所：ヨハネの福音書　３章１７－２１節

今年最後のメッセージになりました。愛する皆さんと今朝も一緒に学びたいのは、ヨハネの福音書３章のみことばです。きょうはこの３：１７－２１を中心に、御子が世に遣わされた理由について考えてみたいと思います。その内容を見ていく前に少し考えてみてください。皆さんはだれか大切な人にぴったりな最高の贈り物だと思ってあげたのに、それを拒否されてしまったという経験はあるでしょうか？少しさかのぼること１９４９年のクリスマスにあった出来事です。ある男の子の家にはクリスマスツリーがありませんでした。母親からツリーを買うお金がないと言われた彼は、きっとツリーを手に入れれば、両親は喜んでくれるだろうと思いました。そこで彼は何とかしてお金を集めようと新聞配達の集金に出かけたのです。日が暮れてから随分時間もたっていましたが、向かったアパートにいた女性は快く家に迎え入れてくれ、チップを含めて８ドルのお金を支払ってくれました。男の子は喜びました。そして家に帰る途中に通りかかったお店で素敵なクリスマスツリーを１本買いました。本当は１０ドルするものでした。でも、店員さんが少し値引きをしてくれて手にすることができたのです。両親がどんなに喜んでくれるだろうかと想像しながら、彼は家に帰りました。そして、玄関で両親を興奮気味に呼んで、びっくりするようなものがあるんだと言いました。でも出てきた母親は明らかに不機嫌そうでした。母親は聞きました。「その木を買うお金はどこで手に入れたの？」、息子は答えます「新聞配達で稼いだお金だよ」。すると母親はあきれて言いました。「あなたは８ドル全部をこの木に使ったの？数日で捨てられるようなものにお金を使うなんて、なんて愚かなの。家の中には入れたくないから、そこに置いておきなさい」と。今の話を聞いて、恐らく多くの人たちがひどいと感じたことでしょう。贈り物だけではなくて、贈り物をした男の子の気持ち、喜び、そういったものに感謝もせず心を留めなかったことは、余りにもかわいそうではないかと考えたかもしれません。

でも、実は私たち自身も普段同じようにふるまっていることがあります。お互いの間ではないかもしれません。でも、私たちはほかのだれでもない神様の贈り物に対して感謝や喜びがなかったり、関心さえ払っていなかったりすることがあるのです。先週のことを思い出してみてください。先週、私たちはクリスマスをともに祝って、ヨハネ３：１６から神様が世に与えてくださった最高の愛の贈り物について考えました。神様が愛された世、それは愛するのが容易な何の問題も抱えていないものではありませんでした。世というのは神様やキリストを心から憎み、悪を愛してかたくなに逆らって歩み続けている堕落した人々だったのです。本来であれば、その世には、神様の愛に値するような部分は一つとしてありませんでした。しかし、そんな世を神様は愛してくれていたのです。しかもただ愛してくださっただけではありませんでした。神様はさばきにのみ値するそんな敵のために、ご自分が最も愛する存在を、かけがえのないひとり子であるイエス・キリストを与えてくださったのです。そしてこの愛する御子を十字架につけることによって、私たちに対するご自身の犠牲的な愛を示してくださいました。ヨハネ３：１６を私たちが見る時に、この愛に勝るものはどこにもないと私たちは確信を持って言うことができました。ことばでは決して言い表すことのできないほど偉大な愛を私たちは目の当たりにしたのです。みことばも言っていました。**「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」**（Ｉヨハネ４：１０）と。

〇御子が遣わされた理由と人の応答：

そして、この最高の愛の贈り物を目の当たりにする時に、私たちはそれぞれふさわしい応答が問われるようになります。神様が与えてくださったその贈り物を知ったその時、私たちはそれに対して応答が

求められます。どんな応答をするべきなのでしょう？そのことをみことばを通して一緒に考えてみたいと思います。特に１７－２１節を見ていきますけれども、ここにはまず贈り物である御子が世に遣わされた理由について改めて述べられ、そしてその後でその御子に対する人の二つの応答が描かれていました。

１．理由：世を救うため　１７－１８節

まず贈り物である御子がなぜ世に遣わされたのか、その理由が改めて述べられていて、そしてその後で御子に対する人の二つの応答が描かれているのを見て取ることができます。ぜひ自分自身のこととして一緒に考えてみましょう。皆さんの励ましになることを心から祈っています。

では、最初にみことばをお読みしたいと思います。思い出すために１６節からお読みします。

ヨハネ３：１６－２１

「:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。:18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。:20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。:21 しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」

では早速、世に遣わされた理由から考えてみましょう。いったいなぜ御子であるイエス様がこの世に来られたのか、その理由がみことばに記されていました。１７節からこんなふうに始まっています。「**神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。:18 御子を信じる者はさばかれない。**」と。はっきりと言われていました。御子が世に遣わされたその理由は世を救うためでした。非常にシンプルに書いていました。本来であれば、神様の御怒り、さばきのみが値した、そんな世、神様やキリストを憎んで敵としてかたくなに逆らい続けていた堕落した罪人を助け出そうとして、イエス様はこの世に来てくださったのです。御子は確かに愛とあわれみにあふれていたまことの救い主でした。別のみことばも繰り返しこのすばらしい真理を明らかにしています。例えば、ルカ１９：１０にこんなふうに書いています。「**人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。**」と。Ｉテモテ１：１５にも「**「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。**」と書いていました。世をさばくためではなくて「**救うため**」、それこそがこの世に遣わされた御子が持っておられた最大の務め、最大の使命でした。

でもこれを聞いて、少し疑問を抱いた人がいるかもしれません。というのも、同じ福音書の中に、こんなことばが記されています。ヨハネ５：２７にこう書いています。「**また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。**」と、また９：３９のところでは、「**そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」**」と、イエス様ご自身が言われています。一方ではイエス様は救うために来られたと言われていて、また一方ではイエス様はさばくために来たと言われていました。果たして聖書は相反することを教えているのでしょうか？別々のことを教えているのでしょうか？もちろんそうではありません。皆さんの助けになると思うので、Ｄ・Ａ・カーソンというひとりの先生がこの部分に関して次のような説明をしてくれていたのでご紹介します。「人の子は、既に失われ、さばかれた世に来られました。中立の世に来て、一部を救い、一部をさばくためではなく、失われた世に救いをもたらすために来られたのです。全世界が救われるのでないことは、次の節（１８－２１節）で明確に示されています。しかし、イエスの使命における神の目的は、この世に救いをもたらすことでした。だからこそ、イエスは後に、『世の救い主』（ヨハネ４：４２）と呼ばれたのです。」と。これが何を言われているかわかりますか？ポイントはこういうことです。

イエス様は、確かに世をさばくためには来られませんでした。いや、そのために来る必要はありませんでした。なぜかというと、それは来られた世というものが、そもそも中立の立場にあるものではなかったからでした。世というのは、何も裁判の判決を今か今かと待っている被告人のような、これから正しいもの、悪いものとは何か侵犯を下されるのを待っている状態にあったのではありません。罪にひどく汚れて堕落していた世は、もうすでに有罪と宣告されていた、すでにさばかれていたものだったのです。生まれながらに罪を持って生まれてきた人たちは、みんな何かしら具体的に罪を犯したから、罪人になってさばかれるのではありません。人は例外なく初めから罪を持った罪人として生まれるからこそ生まれながらに神様の正しいさばきのみが値する存在だったのです。

私たちは何か具体的に罪を犯したから罪人になって、さばかれるのではありません。みことばを見れば、私たちは罪人として生まれ、罪人として生まれているからこそ、神の御怒りを受ける者となり、そのままさばかれるのです。エペソ２：３にはこんなふうに書いていました。「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」と。私たちはいつから「**御怒りを受けるべき子ら**」になったのでしょう？それは「**生まれながら**」にでした。つまり、私たちがこの世に生まれたその瞬間から、「**御怒りを受けるべき子ら**」だったのです。すでに私たちはみんな神様の御怒りを受けるような存在でした。私たちの上には神様のさばきが下るそんな存在でした。もちろん聖書を見ていけば、今のこのさばきと、この先死んだ後それぞれを待っているさばきについても教えられています。逆らい続けたすべての罪人が将来において父からさばく権利を与えられたその子、イエス様によって、さばき主である主からさばきを受けることも約束されています。たとえば黙示録を見れば、その時の様子がこんなふうに明白に描かれていました。この先、将来においてどんなさばきがなされるのか、黙示録２０：１２－１５にこんなふうに書いています。「**:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。:13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。**」と。確かに私たちが聖書を読んでいく時、間違いなく将来においてすべての罪人に実際に下される主のさばきがあることも明白に言われていました。でも、それと同時に、神様のさばきというのは、今もうすでに神様を拒む者の上にあることも言われているのです。罪に対して燃え上がっている神様の御怒りというのは、御子を信じ受け入れない者の上に、もうすでにとどまり続けているのです。確かに私たちは生まれながらにみな神の御怒りを受けるべき、そんな子らとして生まれました。みなさばかれる、そんな者として生まれました。みな有罪と宣告された者として生まれました。そして、そんな状態を変えるためには、私たちにできたことはありません。そんな有罪と宣告された世を救うために、私たちにできないことをなすために救い主イエス・キリストが来てくださったのです。それが御子が世に遣わされた最大の理由でした。もうすでにさばかれるその世の人々を救うために救い主は来てくださったのです。

ただし、前回も触れましたけれども、こうして「御子が世を救うために来ました」ということばを見た時に、これがすべての人が自動的に救われるとか、天国に行けるという話をしているのではないというのは明らかでした。救い主である御子によってすべての人がそのままさばきを逃れることができるとは聖書は書いていませんでした。３章には何と書かれていたでしょう？「**御子によって世が救われるためである。**」、その後にこんなふうに続いていました。１８節の最初に「**御子を信じる者はさばかれない**」と書いてありました。「良い行いを必死に積み重ねた者はさばかれない」とは言われていませんでした。懸命な努力によって、聖書の教えに従い続けた者がさばかれないとも書いてありませんでした。感謝なことにた

だ御子を信じる者が救われ、本来なら当然値したはずの罪のさばきから逃れることができるのだと約束されていたのです。御子を信じるその信仰によって救われると。

このテーマについて、私たちはこの数週間、ひたすら同じように学び続けてきました。みことばは同じ大切な真理を何度も何度も教え続けてくれていました。なぜ聖書は同じことを何度も何度も教えてくれるのかと言うと、それは私たちが時にこの大切な真理を当たり前のように思ったり、感謝することがなかったりするからです。でもこれほどすごい真理はないのです。私たちにとって、これほど大きな希望はありませんでした。私たち自身のうちに罪の解決策は何もありませんでした。敵としてかたくなに歩んでいた私たちは、神様と和解することができるすべを何も持っていませんでした。罪によって堕落していた私たちひとりひとりには、文字どおり神様の御怒りから救われるためにできたことは何もなかったのです。そして、そんな私たちに対して罪を忌み嫌っておられる聖なる神様には、すべてのものを一瞬にして滅ぼす力も権利もありました。でもそんな希望のない私たちに対して、神様が愛を示し、イエス様が救い主として世に来てくださったのです。そして罪深い私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださり、ご自分の血を流してくださいました。本来であれば、罪の罰も御怒りも、痛みも苦しみもそのすべてが罪人である私たちの上に注がれるべきものでした。それにも関わらず、神の御子が十字架の上で、すべての咎も罰もその身に負ってくださり、代わりに御怒りを受けてくださったのです。そしてその尊い犠牲のゆえに、この方を信じ受け入れる者に私たちにはできない救いの道を、神様が備えてくださったのです。

みことばも同じように繰り返しています。ローマ５：８－９には「**:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。**」と書いてました。また、ローマ８：１には「**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」と言われていました。これがイエス・キリストを通して与えられた最高の希望でした。最高の約束でした。私たちには何もできなかったことをこの世に来てくださった御子が成し遂げてくださったのです。こんな御子を心から信じる者は、さばきから助け出され、もうさばきに遭うことはなく、罪に定められることもないという確信を持って歩んで行くことができるということです。何度も言いますけれども、私たちが自分の救いのために、神様の前に何か持って行くことができたものは何もありませんでした。私たちはただ神様のあわれみを求めるしかできない存在でした。そんな者に神様が大きな恵みを示してくださったのであれば、御子がそんな私たちを救おうと犠牲を払って世に来てくださったのであれば、私たちはその愛にただただ感謝するしかないのです。でも、もしこのようなひとり子が与えられていて、なおその御名を信じ受け入れようとしないのであれば、このようなすばらしい賜物が、贈り物が与えられていてなお、その方を拒むのであれば、その結果は当然その人の上には変わらず神様の怒りが、さばきがとどまったままになるのです。１８節の後半に「**信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、<u>すでにさばかれている</u>。**」と書いていました。言われてきたように、唯一の救い主を拒むのであれば、もうその人にはさばきしかないということです。イエス・キリストは世を救うために来てくださいました。それこそがこの方が世に遣わされた最大の理由、目的だったのです。

２．応答：贈り物を拒むか　ｏｒ　受け入れるか　９－２１節

そしてそんな贈り物である御子を私たちが覚える時、私たちにはふさわしくこの方に応答することが求められるようになります。もっと言えば二通りしかない応答のうち、私たちはどちらかを選択しなければいけません。贈り物である御子を拒むという選択か、それとも贈り物である御子を受け入れるという選択か、そのどちらかです。ここにいるひとりひとりみんなこの選択をしなければいけません。この二つ以外の選択肢はありません。同時に両方を選ぶこともちろんできないし、どちらも選びません、私は

ずっと中立の立場でいます、そんなこともできません。ここにいるひとりひとりは、今気づいていようが気づいていまいが、必ずどちらかの応答をしながらもう歩んでいます。皆さんは絶対にどちらかの応答をしながら歩んでいます。救い主であるイエス・キリストを忌み嫌って拒んで、自分の罪を愛してやみの中を今も歩み続けているか、それとも救い主イエス・キリストを心から受け入れて、真理を愛し、光の中を歩んでいるか、そのどちらかです。みなどちらかに当てはまります。そしてこのどちらかは私たちの永遠に大きな影響を与えます。少し自分自身に問いかけてみてください。これから内容を見ていきますけれども、果たしてあなたはどちらの応答をしながら今を歩んでいるでしょう？二つの応答、その内容を考えてみます。

１）贈り物を拒む　１９－２０節

まず一つ目の応答が１９－２０節のところに記されていました。一つ目の応答は贈り物を拒むということです。１９節にこのように続いていました。「**そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。**」と。さて、皆さん質問です。ここで「**光**」と出てきました。この「**光**」とはだれのことでしょう？これはもちろん人として来られた御子イエス・キリストのことでした。同じ福音書の中でも、もう見てきましたけれども、「**光**」というのはイエス様を表す表現として何度も使われています。ヨハネ１：９を見ても、「**すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。**」と書いていました。また８：１２には「**イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。**」とあります。この世を救うために来てくださったイエス様こそ「**世の光**」でした。「**光**」というこの方のうちには汚れや暗いところはいっさいなければ、まさに聖く正しいお方でした。そしてそのような輝かしいまことの光であるお方が世にやって来たのです。

では、そんな光に対してどのように人は応答したのでしょう？先ほど１９節を読みましたけれども、「**光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。**」と書いていました。光が来ているにもかかわらず、人々は光よりもやみを愛していました。何よりも暗やみというものを求めていたと言うのです。そしてこの箇所で一つ注目してほしいことばが使われていました。それは、「**やみを愛した**」と訳されているこの「**愛した**」ということばです。興味深いのは、このことばにはもともとギリシャ語の“アガペー”が使われているということです。“アガペー”がどういう意味だったか覚えていますか？“アガペー”の愛というのは一時的、感情的なものではありませんでした。“アガペー”の愛ということばが使われる時、それは単なる感情で終わるものではなく、みずから進んで自分自身を捧げる、意志を伴った犠牲的な愛を表していました。何かを私たちが心から愛しているからこそ、この愛は一時的な感情ではとどまらず、犠牲的な行為を伴って、そのものに喜んで仕えようとする、それが“アガペー”の愛でした。そして私たちが互いに愛し合う時に、そんな“アガペー”の愛で愛し合うようにと、聖書の中で言われているのです。

でも、そんな“アガペー”の愛でもって、人々はやみを愛していたと言うのです。人々は“アガペー”の愛で罪を愛していたと言うのです。罪人の心というのは、それほどまでに暗やみを好んでいました。聖さも、正しさも神様の真理よりも悪や罪に対して自分の身を捧げて、そしてそれらを己の喜びとして歩み続けていたと言うのです。自分自身を捧げて、自分の罪を愛して生きていました。そして、そのようにやみを、罪を愛していたからこそです。続く２０節「**悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。**」と書いていました。やみを愛していた人たちは光を憎んでいました。なぜだと思います？その答えはシンプルでした。それは自分たちが愛している悪や罪が間違っていると真理の光が照らすからでした。暗やみの中でかくれて行っていた自分自身の汚れた姿が光が照らされることによって明るみに出されることを恥じたり恐れるからでした。やみを愛してる者たちは、自分の中にある罪や汚れた部分が外に出されることを最も望まないのです。

そしてこの罪の性質というのは、最初から何も変わっていません。たとえばアダムとエバが最初に罪を犯したその時、神様にどこにいるのかと問われた彼らは何をしていました？彼らは恐れて隠れていま

した。自分たちの行った罪が明らかになることを恥じた彼らは、何とか木の間に身を隠そうとしたのです。最初のアダムとエバがそうだっただけではありません。それ以外の人たちも同じです。たとえば、神様からすべてのものを聖絶しなさいという命を受けていながら、それに逆らったアカンという人物も同じでした。幾つかのものを自分勝手に盗んだ彼は、その盗んだ物をこんなふうにしてました。ヨシュア７：２１に「**私は、分捕り物の中に、シヌアルの美しい外套一枚と、銀二百シェケルと、目方五十シェケルの金の延べ棒一本があるのを見て、欲しくなり、それらを取りました。それらは今、私の天幕の中の地に隠してあり、銀はその下にあります。**」」と書いています。隠していました。また、アダムやエバやアカンだけではありません。バテシェバやウリヤに対して悪を働いて、主の前に大きな罪を犯したダビデも同じでした。第二サムエル記の中で、神様はこんなことばで彼をとがめている場面が描かれています。Ⅱサムエル１２：１２「**あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』**」」と。隠れるということ、隠そうとすること、これは罪人が持っている性質でした。

私たちも同じようにそれを持っています。心の中で間違っているとわかっている者はそれをだれにも見られない暗やみの中でなそうとします。だれかの目にとまれば恥ずかしいと思うものや明るみに出されることによって気まずい思いをするようなもの、何かしらの責任を取らないといけないようなものがあったりすれば、私たちはそれを暗やみの中に隠そうとします。また、悪いとわかっていながらも自分が楽しんでいるようなものであれば、自分が愛しているようなものであれば、それをずっとやり続けたいからこそ、それをとめるような人が現れたらどうします？本当は悪いとわかっていても、自分が楽しんでいるから、自分が愛しているから、それをずっと続けたいという思いがあれば、私たちは自分の思うままにやっていきたいからこそ、やめたくないからこそ、それをやめさせようとするものに怒りを示すことがあるのです。怒りを示さない人もいるかもしれません。でも、その人は代わりに自分のやっていることにいろいろな理由をつけて正当化してみたり、いろいろな言い訳を並べてみたり、ほかのだれかに責任をなすりつけたりして、自分のやっている行いから人々の目をそらそうとしたりするのです。もしくは罪をそのまま罪として認めようとせず、小さな問題として話をすりかえようとするかもしれません。やみを愛している者たちは、自分の罪を愛している者たちは、その罪を手放したくないからこそ、そのやみの中にとどまり続けようとするのです。

そして、それゆえにやみを愛している者は光を憎むのです。自分の汚い部分が明らかになる、自分の罪深い部分が明らかになる光を遠ざけようとするのです。自分の罪を見たくない者はイエス様を拒絶するのです。まことの光である方が来られているにも関わらず、自分たちの愛するものを間違っていると指摘されたくないからこそ、それをやめるようにと言われたくないからこそ、その光を、そのイエス様を、自分のうちに全く望まないのです。それがやみの中を歩み続けている罪人の特徴でした。かつてスポルジョンもこの点に関してこんなことばを残しています。「キリストを嫌う理由は、罪を愛する心にあります。人がもし罪を抱きしめるのをやめるなら、救い主を受け入れるでしょう。人々がキリストのもとに来ない理由は明白です。彼らは自分の罪を手放したくないのです。その罪のことで心を騒がせたり、叱責されることを恐れているのです。……罪を愛する者は、同時に救い主を愛することはできません。どちらか一方を愛し、もう一方を憎まなければならないのです。唯一の救い主である『世の光』を意図的に拒絶し、罪の闇、悲痛の闇、泣き叫び、歯ぎしりするような外の暗闇を選ぶことは、恐ろしい選択なのです。」と。考えてみてください。私たち自身の心は今何を愛しているでしょう？私たちの心は神様を愛し、同時に罪を愛するようなことは絶対にできません。だとすれば、私たちは光を愛しているでしょうか？それともやみを愛しているでしょうか？滅びへと至る暗やみから離れて、光へと招いてくださっているような、そんな唯一の救い主イエス様を拒んでいないでしょうか？さばきのみが値するような者に対して、最も必要な助けを、最も必要な贈り物を与えてくださったその方を拒んで、それ以外の別のものにずっと心を奪われ続けてはいないでしょうか？自分の罪を愛して、いつまでもそれを手放そうとしない人がもし

いるのであれば、きょうのみことばの教えによく耳を傾けてください。そしてぜひ知ってください。手放したくないと思っているあなたの持っているどんな罪よりも、神様はすばらしい贈り物を与えてくださいました。あなたが何よりも大切だと思っているものよりも、愛の神様は、ご自身のひとり子をそんな私たちのために遣わして、そのいのちをささげることによって救いの道を備えてくださいました。だからそんなお方を知らないと拒まないでください。この方を拒んで何も問題ないと思わないでください。そんな神様のあわれみを今求めて、御子を憎むのではなくて、御子を拒絶するのではなくて、御子を心から信じ受け入れてください。拒むということ、それが一つ目の応答でした。

２）贈り物を受け入れる　２１節

そしてもう一つ別の応答がありました。それが贈り物を受け入れるということです。最後２１節に「**しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。**」と書いていました。先ほどの応答と全く正反対のものがここには記されていました。罪人はやみを愛して光のもとには決して近寄ろうとはしませんでした。でも、まことの光であるイエス様を愛している者は、この方を受け入れた者は、どんな時もこの方のもとに来ようとするのです。本当に救われた者は光を避けようとするのではありません、光をいつも求めて光とともに歩んでいこうとするのです。考えてみてください。信仰によって、恵みによって救われた者もその後、全く罪を犯さないということはありません。救われたその瞬間、その人のうちから汚れや罪というもの、悪というものがすべてなくなってしまうものでもありません。残念ながら、私たちのうちにはまだ罪の性質というものが残っています。私たちのうちにはそういう汚いものがまだ残っています。それゆえに、光が私たちのうちを明るく照らす時、私たちは自分の罪深さを目の当たりにするのです。いや、もっと言えば、私たちが光であるこのイエス様とともに日々を歩み続けていこうとするのであれば、私たちは日々自分自身の罪深さを見るようになっていきます。光であるお方に私たちが近づいていけばいくほど、影が濃くなっていくように、私たちのうちにある罪深さというものははっきりと見えるようになっていきます。そして、その罪深さを私たちが見れば見るほど、その罪深さは私たちにひどい痛みや恥ずかしさをもたらすかもしれません。自分自身の汚さと向き合うのに、大きな犠牲や痛みが伴うかもしれません。でも救われた者は、光とともに歩みたいと願う者は、自分のうちの暗さが見えた時に、それに蓋をするのではありません。そこから逃げようとするのでもありません。かわりに自分を罪のさばきから救ってくださったキリストのもとに助けを求め、どんな時もキリストとともに歩み続けていこうとするのです。

私も皆さんも同じです。日々の歩みの中にあって、自分自身の罪深さを見たくないと思うこともあるでしょう。自分の汚さに触れたくないと思うこともあるでしょう。それでも神様がどれほど大きな犠牲的な愛を示してくださったのかを覚えて、自分を変えることのできるキリストの力に心を留める時、私たちはもう自分のうちには主を悲しませるどんな暗やみも持っていたくない、光であるイエス様を悲しませるようなものをもう隠していたくない、どんどん自分自身の罪深さは見えてくるけれども、それにふたをするのではなくて、光であるイエス様が喜ばれる者として心から悔い改めてあわれみを求めて日々歩み続けていきたいと、やみの中に隠れるのではなく、それを照らしてくれる助けである光を求めて歩み続けて行こうとするのです。

そしてこの歩みは、私たち自身の力でできるものではありません。この歩みというのは私たち自身が称賛を受けるためにやるのでもありません。２１節の最後、真理を行う者たちは光の方にやって来ます。でも何のためにやって来るのか、最後こう書いていました。「**その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。**」と。自分自身の罪深さを知っている者は、自分の力ではその罪深さに打ちかてないことを知り続けていくのです。いつも自分のうちに神様のあわれみが必要だということを、神様の助けが必要なのだということを知り続けていくのです。そして神様が、神様に助けを求めて歩み続けていく、その人を変えてくださるからこそ、その称賛は常に神様のもとに行くのです。私たちがなしたのではな

く、光の方に来た時に、すべてのことが神にあってなされたことを私たちは神に感謝するようになるのです。それが私たちの信仰生活でした。ニコデモのところでも見ました。私たちが新しく生まれることができるのも、私たちの賢さや知恵ではなく、ただ死んでいた者にいのちを与えることのできる神様の奇跡の力によるものでした。真理を行う者として救われた者、新しく生まれた者として歩んでいくその歩みも、私たちの力でなしていくのではありません。私たちは神様の恵みの力に拠り頼んで歩んでいこうとするのです。だからこそ、救いを覚える時に、私たちのうちに誇ることができるものは何一つとしてありませんでした。ただ、私たちのため十字架にかかってくださり、こんな弱く愚かな私たちのうちに働いて変えることのできる、世を救うために来てくださった御子を誇りとし続けるのです。

そのことを覚えるのであれば、いま一度考えてみてください。もし私たちが普段の生活の中にあって、光が働いて私たちのうちを照らし、私たちのうちにある罪を明らかにするのであれば、私たちはそれにどのように応答していくでしょう？自分のうちに汚い部分を見た時、私たちはそれにどのように向き合おうとするでしょう。隠そうとするでしょうか？見なかったことにするでしょうか？言い訳したり、妥協したりするでしょうか？まるで大好きなおもちゃを絶対に手放したくないと言っている子どものように、自分の愛しているその罪を持ち続けようとするでしょうか？それともそれを手放して、光であるイエス様のもとに来ようとするでしょうか？みことばを読んだり、祈ったり、まただれかと会話をしている中にあって、心が責められて自分自身が見なければならない真理を神様が示してくださったとすれば、自分が向き合わなければならない神様に喜ばれない罪が見えたとしたら、それにどのようにして向き合おうとするでしょう？見せられている真理を拒むでしょうか？見たくないものとしてふたをするでしょうか？それとも光であるキリストに立ち返ろうとするでしょうか？自分ではどうすることもできないことを知っているからこそ、あわれみを求めて主の助けを求め続けようとするでしょうか？神様の赦し、キリストの愛というものを知ったからこそ、それに心から感謝するからこそ、その罪から離れて神様が喜ばれる者として歩んでいこうとするでしょうか？

私たちは失敗します。いろいろな点で弱さもあります。でも私たちには希望があります。まことの光はこの世に来ました。この方に私たちは助けを求めて歩み続けることができるということです。聖さを追い求めていくその過程には、いろいろな犠牲が伴います。私たちが脱ぎ捨てなければならないと言われている罪というのは、私たちがかつてどうでもいいと思っていたものではありません。私たちが犠牲を払って心の底から愛していたものでした。そしてそんな罪を私たちが心から悔い改めて古い自分を脱ぎ捨てて歩んでいこうとするのであれば、そこには大きな苦闘があるのです。だから確かに容易なものではありません。だからこそ、私たちにとって大切なのは、いつも私たちの助け主である方に戻ることです。私たちにとって大切なのは与えられた愛の贈り物がいかにすばらしいものであったのかということを思い出し続けることです。私たちが新しく造り変えられた者として歩んでいくことができるのは、罪と闘いながら聖さを求めて歩んでいくことができるのは当たり前のことではありません。神様がなしてくださった愛のみわざのゆえでした。だから神様が示してくださったその愛の偉大さを心に覚え続けることです。

最後に、そんな神様の愛について、一つの聖書の物語の本の中にこんな話がありました。自分自身も読んでいて励まされたので、皆さんにもと思って、最後にそれを読んで、イエス様の示してくださった愛を心に留めたいと思います。

「『お前は王様なのか？』とローマの兵士たちはあざけりました。『ならば冠と衣が必要だ。』彼らはイエスに茨でできた冠を与え、紫の衣を着せました。そして、ひざまずいたふりをして『陛下！』と言いました。それからイエスを鞭で打ち、唾を吐きかけました。彼らは理解していませんでした。イエスがいのちの君であり、天と地の王であり、彼らを救うために来られた方であることを。兵士たちはイエスに『私たちの王』という札を作り、それを木の十字架に釘付けにしました。そして、町の外れの丘へと向

かいました。イエスはその十字架を背負って歩きました。イエスは一度も悪いことをしたことがありませんでした。それなのに、彼らは犯罪者を処刑する手段で殺そうとしていました。兵士が十字架に釘付けにした後、イエスは息も絶え絶えにこう言われました。『父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか分かっていません。』『お前は私たちを救うために来たと言うのか！』と人々は叫びました。『自分すら救えないくせに！』しかし彼らは間違っていました。イエスは自分自身を救うことができたのです。もしイエスが呼べば、天使の軍勢が彼のもとへ飛んで来たでしょう。『もし本当に神の子なら、その十字架から降りて来られるだろう！』と彼らは言いました。そして、確かにその通りでした。イエスは十字架から降りることができたのです。実際には、一言で全てを止めることもできました。あの少女を癒したときのように、嵐を静めたときのように、五千人を食べさせたときのように。しかし、イエスはそこに留まりました。彼らは分かっていなかったのです。イエスを十字架に留めたのは釘ではありませんでした。それは愛だったのです。」